りびんぐらいぶず　令和2（2020）年6月第1号

本願の働きとは何かー腑に落ちるたとえ

◆ご讃題

「経」(大経下巻)に「聞」といふは、衆生、佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり

（Ref 信文類(末)　註釈版聖典 p251)

◆はじめに

布教団通信第四十二号の中に昨年の布教使講会の小林義教布教使の「人の心に灯を」という勝れた一文があり御法話の押さえどころをお聞かせ戴き有り難く拝読しました。

お聴聞の皆様から帰って来る感想に「御法話の内容はすぐ忘れてしまう」という感想があります。布教使はどのようにすれば聴聞者に受けとめて戴けるか苦労されるのですから、聴聞者の方でも押さえどころを押さえてお聴聞することが大事だと云うことになってくるのではないでしょうか。

◆佐藤第二病院　田端正久院長の講演から

田畑正久先生のお話に私たちの生き様は卵の殻の中でいきているようなものだというのがあります。（RefP29 鶏の卵）。

それは、私たちは自己中心という殻の中で、皆それぞれ自分の幸せを願って懸命に頑張って生きている。お金持ちになりたい。出世したい。健康でありたい。それぞれ自分の幸せというものを求めて生きている。でも卵の殻の中で生きている以上、損か徳かの視野で生きることになり、どんなに懸命に頑張ってみても最後は腐って死んでしまう。

卵は親鳥に抱かれてそのぬくもりを受ける。卵が有精卵ならば、親の慈しみによってやがて卵の黄身が成長し、ひよこになり、殻を破って出て、やがて親鳥となっていく。

ぬくもりというのは親の愛情が変化した働きだと云えますが、ウミガメの卵は、太陽光(熱)で温められて羽化する。そうすると大自然の働きだという風に頂戴できる。

浄土教で云うならば、親鳥のぬくもりとは本願の働きであり、仏の智慧と慈悲であると説明できるでしょう。

温められて羽化すれば、ひよことなって殻の中に居る自分に気づき、殻を破って大きな世界に気づくことになりますね。

人間ならばお聴聞でみ教えに育てられ目覚めて仏となるということになるでしょう。

ですから、私たちは、人間として目覚めなければならない、気付かなければならない真実というものに私たちは出遇わせていただくことが大切だということになる。

卵に親鳥がぬくもりを伝えるように、阿弥陀さま、仏さまが智慧と慈悲を私たちに伝え、私達をお育て下さっているということに気付かねばならないということになる。

その中で私というものに目ざめて行く。

なぜ生まれて生きるのか。なぜ死ぬのか。死んでどうなっていくのか。仏さまの智慧と慈悲によって、この私のありのままの姿というものに気付かされ、求めるべきものに目覚めさせていただけることなりますね。

◆P３１ 水馬（ミズスマシ）

前門様のご著書『朝（あした）には紅顔ありて』角川書店刊）に村上志染先生の「水馬（ミズスマシ）という詩を引用された一文があります。

方一尺の天地

水馬しきりに円を描ける

なんじ　いずこより来たり

いずこへ旅せんとするや？

へい？　忙しおましてな！

「方一尺の天地ですから、それは小さな水たまりでしょう。一昔前は、今みたいに道路も舗装されてもいるわけではないので、雨が降ったらすぐ泥道になりました。

真夏の暑い日、夕立なんかが降りますと,底に水たまりができて、ミズスマシが水面をひょいひょいと走り回っているところを目にしたものであります。

「方一尺の天地」というのは、縦横三十センチほどの小さな水たまりが「天地」ですから、ミズスマシにとっては自分が見える全世界になるということでしょう。

「方一尺の天地　水馬しきりに円を描ける」。その小さな水たまりの水面を、くるくる円を描いて走り回っている。

その走り回っているミズスマシに声を掛ける。「なんじ　いずこより来たり　いずこへ旅せんとするや？」おまえさんいったいどこからきてどこへ行こうとしているんだいと聞いたら、ミズスマシは「へい？　忙しおましてな！」、忙しゅうて忙しゅうてそんなこと考えている暇がありますかいな、そんなこと考えて立ち止まってたら、世の中に置いていかれます、損します。そういう返答です。

これもまさに私たちの姿、幸せを追い求めているけれど、本当の幸せというものは、いかなるものかという問いを見失った生きざまということになりますね。

換言すれば「生きている間が花、死んだらおしまい」という考え方になるでしょう。そうするとそういう考え方のどこかを突き破って行く語り、今の「水馬」の詩のようになかなか自分の生き方ということを振り返ることのない私たちに、ズバっと、切り込んでいく、迫っていくような喩え。ぽんと胸に、腑に落ちる。そうした反応を引き出すような、そういう手立ても布教では大事なことだと思われます。

◆信文類(末)に「経」(大経下巻)に「聞」といふは、衆生、佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり」とあります（Ref 註釈版聖典 P251）。

なぜ如来が本願を起こされたのか，なぜ如来が願いを起こされねばならなかったのかということを聞かせて戴くのです。経典に「衆生」と呼び掛けられるときは「私」と読み替えて聞くようにします。

私が阿弥陀如来がご本願を起こされた謂われを聞いて、私を救うためであったといただく。それは、私がお願いしたわけではないけれども、この危うい「私」というものを見て、捨ててはおけない。救わずには居れない。放ってはおけないというのが阿弥陀さまの本願だったからです。この視点から布教使が伝えたかったことを押さえることができるかと云えます。合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会六月7日(日)二十時より

◆仏教婦人会例会　六月十六日(火) 十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥